友よ あの頃

同窓会長 川喜田 貞 久（昭和27年卒）

この度、思いがけなく同窓会の会長をお引き受けすることになりました。自己紹介を兼ねて最近考えさせられる事などを述べ、ご挨拶といたします。

私は昭和九年一月の生まれで、昭和二十一年の四月に旧制津中学校に入りました。小学校六年生で終戦だったわけですが、その時に担任の先生が「悪う言えば日本は負けたんや」と言われたこと、そして樽の絵を描いて、これからは樽をワッパで締め付けて一つにするのではなく、一枚一枚の板が大切になる、これが民主主義だと説明されたことを覚えています。旧津中の校舎の残骸、そして久居の兵舎が校舎になり校庭には焼かれた小銃がもたれあって立っていたこと、頑丈な石造りのトイレも忘れられません。そして、三年生の時に学制改革が施行され橋南中学に転校、二十四年に改めて津高に入りました。まだ校舎が不足で東と西に別れ、やっと三年で一本になったのですが、十五組もあり、同級生でもわからない人が多勢います。二十七年に卒業しました。

終戦のごたごたの中で学校も明確な指針を持てず、かなりいい加減だったと言えそうです。それをいいことにして、反抗期のわれわれは勝手なことをやっていました。津高には今も制服がありませんが、その責任の一端はわれわれにありそうです。一方で制服なしが自由を象徴し大切な伝統になっていると自負もしているのです。一部の先生がそんなわれわれをじっと温かい目で見守って頂いていたように思います。

さて、最近の世相の中でも特に若い人と教育の問題は大変深刻なようです。人間は一人一人が違います。日本の問題は、戦中からまだ引きずっている「画一化」だと思います。一人一人の個性が違うのに一本の物差ししか持っていない大人の問題でもあると思います。津高の自由で柔軟な精神を基礎に、自分の住んでいる地域は自分でよくしていく努力を続けたいと願っています。

タイトル・書「平成15年同窓パーティー・テーマ」 千 草 光 洞（昭和23年卒）

津高同窓会報

発行所
津市新町3丁目1－1
津高等学校
同窓会事務局
TEL・FAX 059-229-7331
共立印刷株式会社

恩師短信……2・3
長谷川素逝句碑移転のこと……3
強烈な夏の憶い出……4
藩校有造館と齋藤督学……5
冨島利男君を偲んで……5
思い出いろいろ……6
世界はひとつ……6
徳田静子さんを偲んで……7
伊藤ミヤコさんを偲んで……7
不思議なめぐり合わせ……8
卒業三十年をふりかえって……8
やらない理屈・できる理由……9
雑感……10
国際開発の現場から……10
旧津中・三重桜・津高校陸上競技OBG会盛会に開催される……11
クラブ活動……11
百二十五周年記念名簿発刊……12
津高校進路事情……13
各地で同窓会開催……14
訃報……15

ご挨拶

学校長　水越利幸

会員の皆様には、ご健勝にてご活躍のこととお慶び申し上げます。

平素は、本校教育活動に暖かいご支援、ご協力を賜り、心から感謝いたします。

今年も全国五支部にて同窓会が開かれましたが、各地に出席させていただき、皆さん方のご活躍に敬意を払うものです。また、八月二日の同窓パーティーが盛大に開かれ、約八百人の会員の皆様が参集されました。昨年同様、皆さん方のパワーに圧倒されました。

さて、本校の教育方針は時代とともに多少の変化をしてきているものの、OBの方々から綿々と引き継いでいる自主自律の精神を基本に据えながら、

(1) 伝統を重んじ、堅実な校風の継続・発展を図る

(2) 人権を重んじ、自由と責任を自覚した人間としてのあり方、生き方を培う

(3) 積極的な学習態度を育成するとともに、個性の伸長を図る

としています。この方針に沿って、教育課程を編成するとともに、充実した進路指導や「自分探し」事業を生徒一人一人の将来の進むべき方向を見出すための体験学習が行われています。過去の進学実績は本県トップレベルではありますが、これからは、東海、全国にも目を向けた学習を構築しなければならないと思っています。学校の特色として、二学期制、65分授業、類型制と選択制、シラバスの活用、学習における学校自己評価の推進など、三年間の学習を計画的にすすめることとしていますが、家庭での学習時間が重要となってきます。会員の皆さんからは、いまの高校生は勉強をしなくなったとよく叱責されます。これは津高生ばかりではありません。全国的な状況となっています。しかし、我々はいかに生徒達の学習意欲をかきたてるかを問題としています。

一方、部活動では各々熱心に取り組んでおりますが、漕艇部、山岳部、弓道部、陸上部、卓球部、水泳部、美術部、音楽部などは県代表として頑張っています。また、年三回のレクリエーション大会では大いに熱くなり、高校時代の良き思い出となっているようです。

今年の夏休み中に第四棟（一階家庭科実習室、二階図書館、三階芸術実習室）の耐震工事を行うとともに内装の工事も行い、見違えるようになりました。リニューアルした図書館で生徒達に今までにも増して読書・勉学に励んでほしいと思っています。

恩師短信

同窓会

飯田　宏（昭和24年卒）

「皆様、御健勝の事と存じます。今度、下記のように…」と度々卒業生から案内を頂く。津高には、昭和三十年から十二年間在職、担当した生徒は延べ五千人、七十歳を過ぎた今、道で出会って、ああ、あの子は津高卒だと判る能力?はあるようです。会合で私に、「あれ、お前誰だっけ、何組だった」と問われます。昔、あれ程、いやだったマットの授業でしぼられた相手と気付いてくれない。こちらも呆けて、何組の飯田と答える。横から阿呆、先生や、で思い出してもらえる。それ程年齢差を感じない同窓会。顔は変わっていないが、おつむの変化は大きい。思い出深く懐かしい同窓会は、私にとって年齢の差を埋めてくれる最高の薬です。

人間細胞百二十年。まだまだ人生の半ば、お互い頑張りましょう。

追

「歩調トレ、カシラー右」で津中入学、東南海地震で逃げまどい、空襲、校舎全焼、終戦、久居33連隊跡へ移転、六・三・三の新制度で高校に、嬉しい男女共学、そして学区制度で津高とお別れ、淋しく転校という波瀾万丈の青春時代。

先年、苦労した津中一年二組のクラス会をもちました。当時は五十人×五組の学年、同窓会をしても一番出席者が多いのは一年二組、それじゃ一度この組で集うかという事で湯の山へ集合したのでした。八割近い級友が集まり、五十五年振りもいました。その一年二組のアルバムが完成しました。陸軍幼年学校受験の顔、焼け残った鉄骨だけの体育館も写っています。このアルバム、今年中にはお手元に届くと思います。お楽しみに。

〃思い出〃

鈴山　寛（昭和26年卒）

年齢を重ねると人は皆昔は良かったと言うけれど、私はそのようには思わない。私達は昭和二十年三月、二日間の入学試験（筆記試験、面接口答試問）の末、津中学に入学が許可された。同年四月、五月、六月と大東亜戦争がきびしくなり、食糧事情も悪化して、体育の時間がすべて農業の時間（公文

先生）に変わり、現在の津高のグラウンド全体がサツマイモ畑に変わってしまった。又現在グラウンドの周囲にある桜の木の所は、防空壕を掘って、そこに軍の飛行機の部品や大量のハンゴウ（ベントウ箱）が埋められた。昭和二十年七月二十八日の津市大空襲で津は焼け野原となり、三重県立津中学校も全焼だった。私は津中の体育館（当時鉄骨）が燃え盛るそばの農道を命からがら亡母と共に逃げたものだった。

戦後、現在津高の北にある新町小学校が焼け残り、校舎の一部を借りて、午前午後の二部授業が行われ、有名な天孫降臨事件（美術・林先生）が起きたのも忘れられない。その下の教室では、私達は英語の授業（沢田先生）の真最中だった。

思い出されることに限りはないが、これ以上紙面を潰しては申し訳ないのでこの辺で…。

これらを思うと、昔は良かったとは決して言えないが懐かしいものであることは確かだ。現在の津高の皆さんに、こんなことしか書けないのが恥ずかしい。

私も早七十一歳、毎日同志十人余りと、津市営入り江コートにて、午前七時から九時まで、早朝ソフトテニスを楽しんでいる今日此の頃です。

津高での思い出

藪内 彦一（昭和26年卒）

昭和五十二年から十二年間、母校の津高で保健体育科の教諭として勤めさせて頂いた。

いきなり三年の担任となった。考え方もしっかりしていて私服でもあり生徒がすごく大人に感じられた。

月日の経過とともに、生徒は個性豊かで、学校には自主・自律の校風が受け継がれていて、伝統の重みをかみしめた。

体育科では、文部省の研究指定を受け、「授業の中での体力づくり」の実践三年継続の二年目であった。期間終了後、体育科七名で分担しあって、成果を報告書にまとめた。達成感、充足感は今でも忘れられない。

また、新学習指導要領の実施に伴い、教科会議を重ねて検討を加え、昭和六十一年度から、生徒が自発的・自主的にすすめる学習、「選択制の授業」を三年生に導入実施に踏み切った。不十分なスタートではあったが、生徒にはよく理解されていて、卒業記念文集にも楽しかった授業のことが多く載せられている。よいスタートをきることができたのも、受け入れてくれた生徒はもちろん、体育科八名の結束も大きなものだったと自負している。

さて、何といっても最たる思い出は、硬式野球部の顧問を十二年間続けたことである。昭和五十九年夏にはベスト四入りをした。これはまず部員の努力の成果ではあるが、生徒多数の大声援に支えられたものでもあり、胸が熱くなった思いが今も脳裏に焼きついている。

教師になった教え子の何人かが野球部の指導者になり、球児を育ててくれている。誠にうれしい限りである。

長谷川素逝句碑移転のこと

小川雄次郎（昭和14年卒）

かさといふくぬぎ落葉に山日和

という句碑を松阪中部台松阪ハイツの庭に建て先生の長女 林 洋子さんを初め大勢の有志の方々のお集まりを得て盛大な除幕式を挙げたのが奇しくも長谷川素逝先生（大正13年津中卒）三十二回忌の命日当日、昭和五十二年十月十日のことであった。

思えばあれから既に二十六年。松阪市松ヶ崎浦在住の津中後輩で当時既にホトトギス派の俳人として活躍していた刀根保二（俳号 双矢）君（昭和20年卒）から長谷川先生の句碑を松阪にも建てたいので協力してほしいと言う要請を受け、常日頃大先輩とつきあっていた三雲村村長で津中、京大を通して素逝先生よりボート部二年後輩の宇野誠一氏（大正15年卒）を代表として句碑建立の事業が発足した。

句碑の製作は双矢君ら若い人々に任せて私はまず母校津中陳川同窓会を中心に地元の俳人、一般有識者の間をかけ廻り暖かい応援、ご協力を得て資金を集める事から始め、事実多額のご寄付を戴く成果を得た。また、この機会を利用して先生の残された珠玉の作品を余さず一冊に収録し、長谷川素逝全句集を編むことがご支援を頂いた方々のご芳情にお応えするのみでなく、一般にも広く真価を世に問わんとすることになり、これが残された我々後輩の不可避の義務ではないかと全句集発行にも踏み切らせて頂いたのである。

主題の句碑建立に先立ち双矢君らの努力で石材千種石を鈴鹿の太平洋建設株式会社社長、清水洋平太氏より寄贈を受け、津の日本土建株式会社社長、田村憲司氏（昭和24年卒）が気軽に運搬の労をひきうけてくれた。

前記句碑の文字は素逝先生の残された数少ない掛軸より原寸そのまま松阪の根来石材店に依頼して彫ってもらったものである。

当時の記録は全て建立委員会解散時に宇野代表の所へ差し出し、剰余金より十万円を句碑管理費として松阪ハイツに寄贈し、残り三十万円余は素逝先生と宇野氏其通の縁につながる津高ポート部に寄贈させて頂いた。現在その宇野氏も既に亡く当時の精しい記録がどこにあるのか全く判らなくなっているのは痛恨の極みと言わざるを得ない。

句碑の方はその後、ハイツの事業拡大から結婚式場その他の建て増しの為、初め建てた所から遥か奥深くの林の中に移転させられていたのである。

今年三月二十三日、旧知の松阪市議会議員で元議長の杉山梅一氏宅から呼び出しを受け松阪ハイツの役員二名から事業不振の為、三月末をもって営業

を終えるのでお預かりしている句碑管理費十万円をお返ししたいと言って信金の利息共々十八万三百六十一円を還してくれた。

その後、当地の新聞などに市役所のハイツ利用法として主に末期癌患者のケアを行うホスピス病棟案が出るに及んで放っておけなくなり友人の藤永義視君（昭和15年卒）と計って津の前市長であり前津高同窓会長でもある岡村初博氏（昭和15年卒）宅を訪れ、前記十八万円余を渡して善処方をお願いしたのが五月二十三日、六月に入って岡村氏のお働きにより津高側の同意も得、又もや日本土建社長田村憲司氏のご好意により津高校庭への句碑運搬を早速実行していただいたのである。

こうして中庭に廣田龍太郎の碑と向かい合う形で素逝先生の句碑も落ちつくべき所を得て落ちつかれたのである。

強烈な夏の憶い出

藤村　辰夫（昭和20年④卒）

甲子園での球児の涙

第八十五回全国高校野球大会に、郷里の代表として宇治山田商業が出場したが、緒戦で近江高校に敗退、残念であった。決勝戦は、八月二十三日行われ、茨城の常総学院が宮城の東北高校を四―二で下し、栄冠を獲得、参加校四、一六三校の頂点を極め、選手一同、感激の甘い涙を流したが、考えて見れば、優勝校を除く、四、一六二校の球児は、皆、戦いに破れ、自分達の不甲斐なさを嘆きつつ、挫折の涙を流し、その悔しい思いを胸に刻みつけ、それをバネに新しい挑戦を始めようと心に誓いつつ、郷里に帰ったことだろう。

〝挫折〟こそ、若者を更に逞しく成長させる動機づけといえる。球児にとって酷暑下の甲子園での熱戦は一生脳裏を離れない強烈な青春の一コマとなったことだろう。

私の真夏の涙

戦中派の私の真夏の強烈な思い出の一日は、昭和二十年八月十五日、天皇陛下による玉音放送が行われた終戦宣下の日である。

当時は、極端な窮乏生活下にあったが、〝欲しがりません勝つ迄は〟一億総玉砕の掛け声の下、わが神国は必ず勝つと信じさせられてはいたが、拡大した前戦での敗退の噂、日増しに激しさを増す都市へのB29による波状攻撃、

広島・長崎への新型爆弾投下等の惨状が伝わるに及び戦局に対する不安が広がりつつあった状況下での玉音放送であった。

〝耐え難きを耐え、忍び難きを忍び……〟と、エコーのかかったようなラジオ放送を聞いていたが、何を仰言っているのか意味不明瞭ではあったが、何となく、敗戦受諾声明と直感、途端に頭は真白、立っている大地が崩れ去る思いで涙留まらず、猛烈な虚脱感に襲われた記憶がある。空を仰ぎつつ、ふと気がつけば、敵の機影無く、周辺も奇妙に静まりかえり、抜けるような真っ青な空、照りつける真夏の太陽といった情景が広がり、何か昨日迄と全く違う世界が広がっているようで、これが平和というものかなと、一瞬感じている自分を見出していた。今もその情景が目に浮かぶ。

在学四年間の歩み

入学昭和十六年四月、卒業は昭和二十年三月④卒、全く大東亜戦争と重なる青春時代であった。昭和十七年秋頃であったと思うが、農閑期、農家への暗渠排水工事手伝い、銀メシの大盤振舞いで大喜び、昭和十九年学徒動員令により、江戸橋にあった三菱名航津工場へ動員された。当時、上昇能力が、アメリカのグラマンより優れている名機といわれていた〝雷電〟の主翼（ジュラルミン製）造りの補助要員として従事していたところ昭和二十年初冬、担任の佐野吉平先生の指示を受け、数人の学友と共に桜橋の元錦華紡績近くにあった軍需省東海監理部特別輸送隊に派遣された。

輸送隊の任務はトラック（確か四屯積みの木炭車）により、軍の指定工場への原料の搬入、半製品等の搬出が主な使命で、従ってトラックの運転と管理下の車輌の整備補修が不可欠で、私共十六歳の子供が車の整備と運転を短期間に叩き込まれ、無免許で半田の穴工場に、工作機械の疎開をしたり、四日市まで物資の受け取りに行ったりと駆り出されていた。当時の戦況は日増しに熾烈化しており、輸送隊所属の隊員が次々に召集され、要員不足で業務に支障を来し、その穴埋めに、軍は未成年を承知の上で、私共中学生を動員したものと思われるが、お陰で、木炭車のエンジンの掛け方、エンジンの分解、ベベルギアの修理等々を体験、自動車の仕組み、その理論も理解でき、敗戦直後の運転免許取得は一〇〇点満点でOKであった。

閑話休題

私共の年令は、支那事変から大東亜戦争へと、正に戦争と共に歩む運命下にあったが、日本の戦いは聖戦であり、欧米が対日物資の補給を断つ為にABCD包囲網を構築して来たので、日本は止むを得ず対米英戦を布告したと教えられ、お国の為にはと、当時の若者は概ね軍に志願し、数多くの可惜有為の青年が散華した。戦いが終われば、日本は侵略国だと烙印を押され、今日に至るも、日本の外交は卑屈で謝罪外交的であり、そのことが私共の年齢層は釈然としない点である。

最近、新聞の書評欄に『歴史の真実』―著者は前野　徹氏（東急グループ総帥、故五島　昇氏の懐刀として当時の政・財界・マスコミとの折衝役として活躍された方）出版社は芙蓉社文庫―を見かけ、早速一読したが、大いに共感、胸のつかえが下りる思いであった。

概要は、大東亜戦争突入の経緯・ハル・ノートの内容、トリガー説、東京裁判の判事の一人、インドのDrパールの調査資料と黙殺されたその発言、GHQ最高司令官マッカーサーが任務を終え帰米してから、米上院聴聞会で行った歴史的証言等々、一般には知られていなかった興味深い事実が資料に基づき述べられているが、同氏曰く「今からでも遅くないから新聞・マスコミ各社は大東亜戦争は侵略戦争ではなく、日本の自存自衛の為の戦争であったと、政府も公式に修正を行うべきだと主張されていると同時に、だからといって支那事変から大東亜戦争に至る日本の一連の行為が総て正しいと強弁するつ

もりはない。中国・韓国での侵略的行為、軍の勇み足等事実関係をよく調べて過去の過ちは謙虚に認めるべきだが、道理の通らないことは堂々と反論すべきで中国や韓国に対し卑屈な態度で接することは問題だと書かれていたが、正に吾が意を得たりの内容で、胸の透く思いであった。

私共が生きている間に、日本人は勤勉で謙虚で併も誇り高く、世界の各国から信頼され尊敬される国家になってもらいたいものである。

藩校有造館と齋藤督学

齋藤　正和（昭和23年卒）

旧津中の同窓会を陳川会という。これはこの学校がもと古河にあったからだ。明治の初め旧津中即ち三重一中は古河の旧藩校武道場・演武荘の跡に建てられた。ではなぜ陳川というか。陳の字は陳腐という熟語でもわかるとおり古いという意味がある。それで古河を漢文趣味の人が陳川としたのだ。ところで藩校本体はどこにあったかというと、今の丸の内のＮＴＴがあるところだった。国道23号線に面したＮＴＴ敷地の角に「津藩藩校有造館跡」という石柱が立っているからご存じの方も多いだろう。古河の演武荘は後で建てられたものだ。藩校は通常「有造館」とよばれるが、正式には「津藩惣問所」であった。その大学部門を「有造館」、中等科を「時習館」、初等科を「養正寮」、兵学講習所を「整暇堂」といった。養正の名だけが今日も小学校に残っているが「有造館」の名が消えてしまったのは実に残念である。「有造」とは「有為」という意味で、中国の古典中の古典、『詩経』から採った真に好い名であるのだが。

藩校は武士のための教育機関であった。身分社会であって庶民は能力があっても藩校へ入れなかったから、この事自体は民主主義の今日、許されないことだが、武士に社会の指導者としての自覚と教養を与えようという趣旨は重要なことだ。なぜなら今は社会の指導者たるべき人にその自覚と倫理が足りないからである。

この藩校の第三代督学（学長）は齋藤拙堂といい、彼が督学のとき藩校の経営はもっとも業績があがったという。今でも人文系の大学では図書館の蔵書数がその大学のステータスの目安になるが、拙堂は津藩校の図書館を大いに拡張した。それもあって全国から多くの留学生が来ていた。逆に津藩の学生を江戸や長崎に留学させて洋学を学ばせた。彼は津藩下級藩士の子として江戸で生まれた。幕府の学校昌平黌を卒業した秀才だというので文政二年（一八一九）に藩校が創建されると、すぐ教官に採用され二十四歳の時に津に移った。二十七歳の時には講官（教授）に昇格している。藩校有造館の学風は案外自由だったようだ。彼は昌平黌で古賀精里から朱子学を学んだが、朱子学の「事物の理を窮めよ」という教えを自然科学にも及ぼし、儒学中心の藩校に洋学を導入する開明家でもあった。

江戸時代が封建制だったということは誰でも知っているが、江戸時代の文書に「國家」と書いてあると、ついうっかり「日本國」だと思ってしまう。実は「藩」のことなのだ。「日本国」を意味するのは「邦」である。拙堂は「邦」の最高学府であり母校である幕府の昌平黌から教授にスカウトされそうになったが、津藩主にご恩があるという理由でこれを断って津藩校の教官に留まった。「国」の学校にそれだけ魅力があったのだろう。「お殿様」が喜んだのは勿論のことである。

江戸時代も初期においては武士に学問は無用だという空気が支配的であったが、拙堂の生きた幕末には西欧列強の圧力をはねかえすためにも学問の必要性が認識されるようになっていた。拙堂の開国論、北海道屯田論など学問をベースにした提言は、彼がオピニオンリーダーの役割を十分果たした証左だと思う。

藩校有造館が廃校になってから約百三十年。有造館精神は旧津中、現津高に受け継がれ、その間多くの有為な人材を輩出した。今日、地方分権化とグローバル化の大合唱を聞くにつけ、江戸末期、地方の文化を双肩に担い同時に鎖国の中で海外の知識・技術を懸命に模索した拙堂たち津藩校の人々の努力に思いをいたすべきだと思う。

冨島利男君を偲んで

清水　一男（昭和22年卒）

訃報を受けたのは、七月四日、(協)津卸商業センターの副理事長会議の席上でした。一同耳を疑い絶句の状態でした。

小学校から中学へと共に学んだ私としては、大きな屋敷へ友人と遊びにお邪魔した事、戦時の中学時代の頃より(協)津卸商業センターの設立等今日に至る迄の色々の事が思い出されたひとときでした。特に(協)津卸商業センターの設立には、理事長として情熱を燃やし、若さと抜群の指導力を発揮して模範的な団地に育て上げられ、全国卸商業団地(協)連合会の役員も勤められました。

大学卒業後は、家業に専念するかたわら、早くから経済界で活躍され津商工会議所副会頭、三重県中小企業団体中央会副会長、津法人会会長等を歴任されました。

一方学校教育の重要性を認識され小学校から高等学校のＰＴＡ会長、津市教育委員長、三重県教育委員長の要職をも歴任されました。又陳川・三重桜・津高同窓会活動においては副会長として、同窓の人脈を大切にされ永年に亘りご尽力されました。とりわけ陳川同窓会では東京、大阪始め各地の総会に出席して会の発展につくされました。

以上のように経済界のほか、各界で幅広く活躍された功績により、藍授褒章を始め通産大臣、文部、郵政、総務各省の大臣表彰もお受けになり、誠に稀有な存在でありました。

冨島君、持前のバイタリティーで駆け抜けた七十余年の人生は、余りにも密度が高く寿命を縮めたのではないかと誠に残念でなりません。安らかにおやすみ下さい。

思い出いろいろ

木村すみ子（昭和24年卒）

長男を背中におんぶし、長女の手をひいて、夫と共に津から名古屋に移り住んだのは、昭和三十四年三月でした。その年の九月二十六日に伊勢湾台風が名古屋地方を直撃し、大きな被害を受けました。幸い私は瑞穂区で事なきを得ましたが、それでも家の前の道路は冠水し、すごい暴風雨でした。あれから四十四年の月日が流れ、年を重ねるにつれて、昔の事が、懐かしく思い出されます。

昭和十九年十二月七日、女学校の帰り、岩田橋近くまできた時、地響きと共にすごくゆれ前方の道路が大きくひび割れ、とても怖い思いをしました。東南海地震でした。

空襲がだんだん激しくなり、夜中にB29の爆音に、家族中が息をひそめて、肩を寄せ合い過ごした事は今も忘れられません。

二十年の八月から高茶屋へ学徒動員に行くと聞いていましたが、七月二十四日、二十八日の大空襲で津の町は焼失し、間もなく終戦を迎えました。家を焼け出された我が家は、父が開業医をしていたので、患者さんの家で間借り生活です。二学期が始まった時、同じ野田から柳山へ通っておられた伊東きぬえさんが、私を呼びに来て下さり、神戸でその地区の方と合流し、柳山までのあの遠い道を毎日てくてく歩いて通いました。下駄の鼻緒が切れて裸足で歩いた事もありました。きぬえさんが呼びに来て下さらなかったら、私は柳山まで通えなかったと、感謝しています。

翌二十一年には、父が借家をみつけてきて、津にもどりました。

そして二十三年五月に、いよいよ津中と合併です。久居の運動場で、対面式をし、津高となりました。あの日の事は、今もはっきり憶えています。授業も必須科目と選択科目に分かれ、若林先生から時間割についてご説明があり、科目によっては、一級上の方と、同じ授業を受ける事もあり、男女共学が始まりました。代返という言葉も初めて知り、男の方は返事をして窓から出ていく人もいました。大きな窓は枠だけで、出入り自由でした。女学校時代のあの暖かい楽しい雰囲気とはすっかり変わり、荒れ果てた教室でした。

その頃我が家の事情は、父の手伝いをする人もみつからず、男兄弟が多く、そこへ妹が生まれたので、母は大変で私は家の手伝いをし、学校のクラブ活動も出られませんでした。弟も妹の守りをしました。兄は受験勉強に一生懸命でした。七人の兄弟が陳川二人、三重桜、津高四人と津高同窓会員であることを誇りに思っています。

今年八月十日、卒業以来初めて、小学校の同窓会があり、津を訪れました。懐かしい人々と会った後、リージョンプラザの戦争展を見に行き、戦災爆死者の名簿で津で二千五百有余人の多くの方が犠牲になられた事を知りました。ありし日の友の顔が浮かびました。今一度語り合えない事が残念です。いつの間にか、私も七十一歳になりました。

世界はひとつ

中川美和子（昭和20年入）

私も片言の中国語。それでも、身振り手振りと筆談で通じる。彼は、ひらがなとかたかなを、私の手作りのカードを使って猛勉強をしている。昨年の十一月初旬、私が中国に出かけた時、「北京寒い。大衣（ターイー）・裤子（クーズ）・帽子（マオズ）」「一路平安」と気遣ってくれた。万里の長城で皆が寒さにふるえる中、私は心身共に暖かかった。

「ありがとう。羨ましがられたよ」

「よかった。無事にお帰りで」

国籍や家柄、学歴など関係ない。私は、彼から、心優しさ、気配り、温かさを教えられた。

バングラデッシュ出身のBさんは、米国と日本に留学後、現在は大学で研究生活を送っている。専門書に必要な高度な日本語に挑戦している。彼は育児を手伝いながら夜半十一時頃まで予

「世界はひとつ」以前はキザな言葉だと思っていたが、外国の人に日本語や日本文化を教えるボランティアとして、国際交流のお手伝いをする機会に恵まれてからは、「その通り」と心底思うようになった。

最初に中国の方を紹介されたが、私は中国語ができず、

「これ、わかりますか?」と問うこともできず相槌さえうてなかったので、一旦お断りすることにし、以来、私は中国語を学ぶことにした。

中国出身のAさんは片言の日本語。気分は若くても、老いはどうすることもできません。

津高名古屋同窓会では、本部から、来賓の方々のご来臨を賜り、九月に同窓会を行っています。式次第のあと、テーブル対抗のクイズを行います。校長先生の読まれる津高に関するクイズで、正解の多い組が優勝ですが、同点となると、ジャンケンで勝ちを決め、優勝、入賞組には、スズケン㈱さんから賞品も出るので、皆すごいパワーで盛り上がります。ゴルフ会も昨年より参加させて頂きましたが、幹事さんの心くばりで、後輩の方々とのプレーは実に楽しく、皆さんから元気をいっぱい頂きました。大勢の後輩に恵まれとても幸せです。ゴルフもまだまだ続けたいと思っています。

習をすると言う。暇のある無しではない。意欲や努力を感じる。故国の母を想い、母の世話をする姉を気遣い、しばしば国際電話のダイヤルを回す。物価高の日本で、貯金が少しできたと喜ぶ。何と、よき父親、夫、息子であることか。

豊かになった反面、型が古くなった、色があせたと物を捨てる。気に入らないとキレる。幼児にまで暴力をふるうなど、情けない日本の現状が私は悲しい。

彼は自分に厳しく他人には寛容で、「申し訳ございません」とか、「おかまいなく」などの言葉が即座にでる。外国の人なのに。

「日本の無礼者に、貴方の爪の垢でも煎じて飲ませてやりたい」「爪の、ですか?」彼は爪を隠した。

「いいえ、貴方が立派だという日本の表現なの。心配しないで」

二人で笑った至福のひとときだった。

ブラジルより帰国のC老婦人。六歳でブラジルに渡り、昨年帰国した。義務教育を受けていない。古稀を過ぎ、進学でも就職でもないのに、読み書きを、初めから教えてほしいと言う。

「私日本人だもの。覚えたいよ」と、前回の復習を欠かさない。古いノートの空白を利用している。

ひと息ついた時、

「ツルでも折ろうか」と色紙を出したら、私の出費を気遣う。価値観やお金の使い方は人それぞれ。私も贅沢は好まない。ささやかな出費が私達には似合う。

「ツルをダンナにやりたいのよ」

「どうぞ」私の折った鶴も渡す。折り鶴に喜ぶ夫婦。鶴も幸せ。

登校拒否の児、授業をサボる児、キレる児やその親に、

「この人達を見よ」と言いたい。

ここに集う外国人達は嘘も見栄もない。明朗で優しく、感謝の心が一杯。

日中戦争・太平洋戦争を通じて鬼畜英米と聞かされてもきた。

以前は外国人に偏見がなかったわけではない。—が、今は違う。

夜七時半、「さよなら」「グッドバイ」「再見」と挨拶がとびかい、それぞれが家路につく。「世界はひとつ」そして「世界中みんな仲よし」と願いつつ。

徳田静子さんを偲んで

野田美代子（昭和14年卒）

四月二十日午後九時頃、ご家族からお電話を頂き、治療を受けておられた病院からのご遺体をお迎えすべく、お宅へ駆け付けました。

徳田さんは、忍耐強く自己管理がよくお出来になり、最後の時まで、六月六日のクラス会の相談を共にし、楽しんでいらっしゃいました。私は悲しみの中で、八十二歳のご生涯を思い返し、感謝と尊敬の念で一杯でした。

ご遺体が帰られた時は、ご近所の方々が号泣されているのを目のあたりにして、皆さんとのお付き合いも大切にされていた事がよく分かり、さすが三重桜の鑑と感心致しました。

「名は体を表す」と云いますが、徳田静子さんは「名は人柄を表す」方であったと思います。徳を田で耕し、静かな中に凛としたものを持っておられました。

私達同級生は多くの良き思い出を頂き、悲しみと淋しさに胸を痛めています。天国での再会を思いつつ、それまでは徳田さんのように、皆から愛され惜しまれる余生を送りたいと、願っています。

三重桜津高同窓会役員として、お世話頂きました事を、心より感謝いたします。

徳田静子さん、安らかにお眠り下さい。

伊藤ミヤコさんを偲んで

丹羽 雅子（昭和15年卒）

昭和十年県立津高女入学、高橋ミヤコさんとの出合いでした。「ピアノのミヤコさん」と記憶していたようです。ある時ミヤコさんは「幼い頃のピアノの練習はつらかったけれど何より悲しかったのは外で走り廻って遊べなかった事」とつぶやきました。私は「はっ」としました。彼女は足が不自由でした。

その後戦争によって進路を変更させられたミヤコさんは、はからずも私と同じ中学校教師の道に入りました。来る日も来る日も講習を受け受験しどんどん免許を取り続けました。そして音楽教師としての実力を発揮しました。その成果はすばらしい受賞の栄に輝きました。

退職後は、津高同窓会の副会長としてご尽力いただきほんとうにご苦労様でした。その間も音楽活動を続け老人の音楽指導にも力を尽くすなど幅広い活動を続けられました。

何時の頃からかミヤコさんは糖尿病を患いきびしい食事制限にも堪えていたようです。歳を重ねるにつれ大きく体調を崩され眼も悪くなったようです。

しかし身体は蝕まれても決して蝕まれなかったもの、それは精神力でした。秀れた素質があったにせよ、いつも前向きで落ち込むことなく全力投球の八十年の人生はほんとうに立派でした。私達はその事を忘れずこれからの人生を力強く送りたいと願っております。

不思議なめぐり合わせ

服部　重彦（昭和35年卒）

津高等学校を卒業して四十数年が経過しようとしている。高等学校の時代からサイエンスが好きで、その道に入って現在も現役でその世界に身をおいている。高校時代は数学が好きで英語が嫌いという典型的な理系タイプであった。当時は各科目の席次が渡り廊下に張り出されるわけであるが、英語では一度もランク入りを果たせず、悔しい思いをしたことは今でも鮮明に覚えている。そんな自分がアメリカに通算十一年も住み、英語とは切っても切り離せられない人生を歩むとは不思議なめぐり合わせである。

不思議なことは人生で何度も起こる。突然私は今年の六月にノーベル賞で一躍有名になった島津製作所の社長を務めることとなった。ノーベル賞が我々の仲間から出るだけで不思議な縁であると思っていたら、突然その会社の社長のお鉢が回ってきたのである。そして知らぬ間に時の人となり、注目度が高まってしまった。注目されることは大変光栄なことであるが、その一方で注目されることの煩わしさはこんなものであるのかと思い悩んでいる。

でも自分にとって大変うれしいのは音信が途絶えていた古い友人から懐かしいお手紙をいただくことである。津高の同期の何人かからもいろいろ激励のお手紙やお電話をいただいた。せっかくの機会なのでノーベル賞にまつわる話を少し書いてみる。

京都の一企業であった島津製作所が突然テレビの画面に登場し、一躍世界の島津に羽ばたいたビッグニュースが日本中を駆け巡ってからはや一年を迎えようとしている。当社の田中耕一さんがノーベル化学賞を授与されたことは日本中を驚かせたし、おおむね好感を持って迎えられた。特に民間企業に働くエンジニアにとっては、無名で博士号すら持たない一技術者の快挙を自らのポジションに置き換えて手放しで賞賛しエールを送ってくれている。私自身も島津製作所で長年分析機器開発に携わり田中さんをよく知っていることもあり、何か自分ごとのように喜んだものである。最近どこへ行っても田中さん効果で業績急回復ですねといわれる。もちろん田中さん効果は計り知れないものがあるが、現状では未だ当社の業績に大きく寄与しているわけではない。というのは新聞紙上でも話題になっていたが、当社が田中さんの技術を当時事業化することができず、欧米メーカーに後塵を拝しているという事実があるからである。

決して手を抜いたわけではないが、当時彼の研究が蛋白の解析にそれほど有効な手段になるとは誰も想像していなかったからである。要は〝目利き〟がなかったのであろう。目利きという言葉はサイエンスに携わる人間にとってはいかにも古めかしい言葉であるが、サイエンスにとって実は〝目利き〟が最も重要なのかもしれない。加齢とともに目利きが衰えるという人もいるが、いまだ現役である私にとっては目利き術を磨き続けなければならない。また第四の不思議なめぐり合わせが近くに迫っているかもしれない。そんな夢を持ち続けて精進を続けている。

（㈱島津製作所社長）

卒業三十年をふりかえって

楠井　嘉行（昭和48年卒）

私は、昭和四十八年三月本校を卒業しましたので、卒業後、すでに三十年を経過しました。今日までを振り返ってみたいと思います。

高校時代は、田舎の亀山市から蒸気機関車に乗って通学し、梅雨時や台風時に豪雨で氾濫した津新町駅周辺を、裸足でびしょぬれになって歩いたことを覚えています。

高校二年生の秋、法律家を志すことを決めました。昭和四十年代は高度経済成長下にあり、公害問題等社会のひずみが出てきており、社会正義の実現に胸を膨らませていました。当時の担任で進路指導をして頂いた高瀬義孝先生は、鬼籍に入ってしまわれました。

しかし、司法試験は私にとって大変難しい試験であり、昭和五十七年十月ようやく合格できました。三重県庁に勤務しながらの受験でしたので、苦労しました。

昭和六十年四月、三重弁護士会に入会し、弁護士としての活動を始めましたが、多くの諸先輩の励ましや支援のおかげで、現在、津市内で四人の弁護士を有する法律事務所に発展しました。

弁護士生活十八年余の中で最も思い出深いのは、平成十一年五月から平成十二年三月まで勤めた三重県信用組合の金融整理管財人の破綻処理の仕事です。

三重県信用組合は、平成十一年三月末で預金が約四六〇億円、県内一一店舗を有する地域の金融機関でしたが、バブル期の有価証券運用の失敗、貸付金での多額の不良債権の発生、抜本的な体質改善を行えなかったこと等により、大幅な債務超過に陥り、これ以上金融機関としての業務を続けると預金等の払い戻し等もできなくなり、顧客に多大の悪影響が及ぶと判断をされ、全国で二番目に金融再生法に基づく破綻処理がなされたのです。

私は、本校の大先輩で金融実務精通者（住友銀行出身、元三重銀行常務取締役）である池田秀樹氏とともに約十ヶ月間懸命に破綻処理をしました。悪戦苦闘のつらい毎日でした。

連日顧客からの払い戻しがなされ、短期間に大量の預金が流出しました（取りつけ騒ぎ）。高校日本史の昭和大恐慌（台湾銀行の閉鎖等）を思い出し、約一〇〇名の職員の再就職に奔走したのです。

「時間」「人」「物」「金」がない中で全力を尽くしたつもりです。午前七時頃起床し、夜遅くまで寸暇を惜しんで管財人の仕事をしました。土曜日・日曜日も出勤し、マスコミに追いまわされ（新聞、テレビで頻繁に報道されました）、「時間が足りない！」と叫びながら三重県信用組合の本支店、法律

事務所、関係機関等を走り回りました。

おかげで、我が家の長男（当時、小学三年生）は、大被害を受けました。日曜日の朝、私を起こしにやって来て、「インチキ弁護士早く起きろ！」「僕は学校で六年生にインチキ弁護士の息子とかインチキ管財人の息子といじめられてるんだぞ！父ちゃんは知っているのか」「もっと僕と遊べ！」と叫んでいました。

また、夜遅く家へ帰ってきても、夜回りの新聞記者につかまらないように懐中電灯で裏口から家に入り、入浴してすぐに睡眠に入る癖がついてしまいました。電灯がつくと、在宅がばれてしまうからです。なんと情けない生活かとつくづく思ったのです。

本校の大先輩である速水正先生からも暖かい激励の手紙を頂戴しました。速水先生のご尊父も戦前、弁護士として四日市銀行の破綻処理をされたそうです。

百五銀行の川喜田貞久頭取（当時）や田中正孝担当常務らのご協力もあり、無事に百五銀行への事業譲渡もできました。約十ヶ月間で大過なく破綻処理ができましたが、これは預金保険機構や三重県等の関係機関の方や関与弁護士、職員らのおかげであり、大変感謝しています。

最近、「少年老い易く学成り難し」を痛感しています。毎日の業をこなすことで精一杯であり、前進的なことは何もしていないのではないか、もっと真剣に勉強して取り組むべきではないかと常に反省しています。高校・大学時代にもっと数学や理科を勉強しておけば、時代に乗り遅れない数学や科学に強い法律専門家になってたのではないかとも思います。懐かしい高校時代の初心にかえって少しでも前進的な取り組みをしたいと思っています。

皆様の益々のご健勝と発展を祈念します。

（楠井法律事務所）

やらない理屈・できる理由（ワケ）

前葉　泰幸（昭和56年卒）

午前〇時一三分＝震度六弱
午前七時一三分＝震度六強
午後四時五六分＝震度六弱
平成十五年七月二十六日、宮城県北部連続地震発生後、私は、宮城県庁の災害対策本部事務局で、相次ぐ救援要請とマスコミからの問い合わせに追われていた。宮城県に出向して三度目の夏は、地震被害からの復旧復興の推進に明け暮れることとなった。

翌二十七日、防災担当大臣を団長とする政府調査団の被災地入りに随行。一日の間に三回も強烈な揺れに見舞われ、震源が十二キロと浅かったことから、多くの住家が壊れていた。崩壊した小学校や亀裂の入った堤防も応急対策を要したが、全壊一、〇七五棟、半壊二、九六一棟にのぼる住家被害からの復旧が大きな課題となった。

遡ること八年、平成七年の夏、阪神淡路大震災の被災者の多くがまだ避難所での不自由な生活を強いられていた。その頃国会では、被災者への個人補償を行うべきではないか、という議論がなされていた。自然災害により住宅・家財に被害が生じた場合の損失について国が補償すべきとする主張である。

当時、国土庁防災局に勤務していた私は、毎日のように政府側の国会答弁を書いていた。「私有財産制度の下では、個人の財産は個人の責任で維持するものであり、自然現象によってそれに損失が生じても、自助努力により回復すべきである」と。

国が補償を「やらない理屈」を国の職員としてきちんと整理し、主張するのが、当時の私に与えられた職務と責任であった。この理論は、国家財政を破綻させないためにも必要であった。しかし、自分の中のどこかに、ひっかかるものを感じていた。被災者の生活再建支援として、行政ができることは本当に何もないのだろうかと。

時は戻って宮城県北部連続地震発災一週間後の八月二日、第十三回宮城県災害対策本部会議は、被災住宅再建支援制度の創設を決定した。全壊住宅を建て直す被災者に百万円、半壊住宅を補修する方に五十万円を、宮城県が支給する制度である。直後の記者会見で、浅野史郎知事は、「大変な損害を被った生活の場としての住宅を前にして、手をこまねいているわけにはいかない。被災者に一日も早く住宅を再建していただくため、県独自の支援制度を構築するのは行政の責務である」と語った。

この支援策に要する経費は、二十億円を超える。年間県税収入約二千三百億の宮城県財政にとって、決して小さい額ではない。財源をどこに求めるか、県議会の理解が得られるであろうか、不安は尽きなかった。しかし、私は、この政策は「できる理由（ワケ）」があると思っていた。被災者の生活再建支援は、被災地以外の県民からも必ずや支持を得られるもの、という行政マンとしての感覚があった。

その後今日まで、この制度に反対する県民の声は聞かれず、理論面から批判する学者の論文も発表されない。もちろん、内閣府（旧国土庁）からの指摘もない。マスコミも、宮城県の素早い対応を評価する論調が多い。

住宅を被災された方に行政がお金を出す、という姿に変わりはない。それを、国が「補償」として「やらない理屈」は確かにあった。しかし、県が「生活支援」として「できる理由（ワケ）」も十分成立した。

血の通った行政、市民の視点に立った政策、県民の真のニーズを把握した公の役割、こうした事柄を考え続けて二十年になろうとしている。これからも、「やらない理屈」を考え出すよりも、「できる理由（ワケ）」を語り続けていきたい。

（宮城県総務部長）

雑感

吉田　悦教（昭和58年卒）

本年七月に、総務省から異動となり、経済再生担当の理事として徳島県庁に勤務しています。仕事柄、経済関係で最近自分が感じたことを少しお話ししたいと思います。

現在、地方の景気回復の実感は未だ十分ではありませんが、一方で、日本全体の景気は、日本の経済に大きな影響を及ぼすアメリカの景気回復に引っ張られる形で、輸出を中心に上向きつつあります。

しかし、今回のアメリカの景気回復は、一部で「job loss recovery（雇用を失う景気回復）」と呼ばれ、人員整理などのリストラが企業の業績回復などを支えているのではないか、「winner gets all（勝者一人占め）」の結果となっているのではないか、との指摘もあります。

この話だけですと、アメリカは、競争という弱肉強食の理念だけが支配する社会のようにも見えますが、一方で、宗教心をベースにした多くの人々の慈善活動や社会貢献活動、いわゆるボランティア活動も盛んで、社会全体でもその意識が広く認められており、経済的・社会的な弱者の方の大きなセーフティネットがある社会でもあると言え、これがアメリカの失敗をおそれないチャレンジ精神を支えている一つの要因でもあると言えます。

自分なりの理解をすれば、「競争」を徹底するならば、同時に、経済原理以外のボランティアの精神が十分に定着した大きな「民間の」セーフティネットのある社会であることが必要であり、これがなければ、治安の悪化など社会の荒廃は避けられないと言うことではないかと思っています。

日本でこうした民間のセーフティネットが十分であるかどうかを考えると、自分としては、まだまだ心許ないのではと思っています。

最近、日本からアメリカの大学への留学や企業に勤務する方が増えていることもあって、帰国後、アメリカでの生活と日本での生活を比較し、アメリカの方が住宅状況や生活水準が良かった、日本はもっと「競争」を徹底すれば、日本でもアメリカのような暮らしができるという類の話を時々耳にします。しかし、慈善活動や社会貢献活動など民間のセーフティネットが不十分なままでは、どこを出歩くにもボディーガードが必要な暮らしが待っているだけではないかと感じています。

（関話休題。

現在、徳島県は、本年の六・七月に県内一・二位の建設会社が連続して経営破綻するなど、非常に厳しい状況にあります。失業率も高止まりしており、特に、障害者の方の雇用が急速に悪化している状況を見るにつけ、自分の仕事である県内経済の活性化に際しては、確かに「競争」原理は必要なのですが、こうした日本と諸外国の社会的な背景の違いも意識する必要がある、と最近強く感じているところです。

（徳島県経済再生担当理事）

国際開発の現場から

瀬古　素子（平成3年卒）

「キリンを冷蔵庫に入れる方法を考えなさい」

半ばなぞなぞのようなこの質問は、数年前にアメリカで流行った職業適性診断ジョークで、問題把握能力を計るという質問です。質問の内容は当然異なりますが、問題の本質を的確に捉え、できるだけ効果的でかつ独創的な対応策を導き出すことが求められる国際開発の舞台裏では、日々冒頭の質問例のような難問に直面し、頭を抱える専門家の姿が見られます。

このような国際開発分野の一員として国連機関で働き始め、早くも五年が過ぎました。東京・カンボジアでの勤務を経て、今年からはUNIFEM（国連婦人開発基金）のHIV／AIDSプログラム担当官として、ニューデリーに赴任しています。国際公務員という職業が何たるかも解らないまま、連日ニュースに映る国連安保理会場の国際色に惹かれ、国連で働くことを決意したのが津高三年の初秋。一昨年、出張で訪れた国連本部で安保理会場に足を踏み入れた途端にこの十八歳の決意が蘇り、当時の無邪気な国連への憧れに苦笑いしつつも、津高のような大らかな環境で自分の将来に思いを馳せる時期を過ごせたことを幸せに感じました。あの頃、ボート部の艇庫からぼんやりと伊勢湾を眺め、毎日田んぼの中の一本道を自転車で通学していた私。あれほどのどかな毎日の中で、よくも世界を飛び回る仕事に就く野望を抱いたものだと今でも時々考えます。

国連の中でも最も軍事・外交色の強い安保理会場に憧れた私ですが、現在は開発途上国における様々な社会問題の解決、中でもエイズ対策と女性の地位向上のための政策評価を専門にしています。インドに赴任してからは、「エイズ危機前夜」と言われる東南・南アジアの国々の政府に対し、各国の対エイズ政策をジェンダー（社会的性差）配慮型にするべく、政府担当者の教育や政策立案のための技術支援などを行っています。現地の女性省及び保健省やNGOなどと連携し、女性を中心とした受益者のニーズに応えたエイズ対策の立ち上げに奔走する毎日です。

私の日常業務の中でも冒頭のキリンの質問ではありませんが、即答できないような問題にたくさん出合います。電気も通わない、村人のほとんどが文盲である地域の人々に、どうすればエイズの予防方法を的確に伝えられるか？今夜の食べ物を買うお金を稼ぐために売春する女性たちに、十年後に死ぬ病気から身を守ることの必要性を理解してもらえる方法とは何か？女は家で家事育児をしていると暴言を吐く政府要職のオジサンに、小娘のような私の話を真剣に聞かせるにはどうすればいいのか？まだまだ国際開発のプロへの道は険しいですが、私の担当する国々に住む人々が少しでも良い生活を送れる

よう、これからも努力を重ねていくつもりです。

なお、蛇足ではありますが、冒頭の質問の答えは、(1) 冷蔵庫を開ける (2) キリンを中に入れる (3) 冷蔵庫を閉じる　です。この単純な問題を、必要以上に難しく考えることなく正答された方、その的確な問題把握能力と柔軟な発想を最大限に活かすべく、我々と共に国際開発の現場にぜひご参加いただきたいものです。

（国連婦人開発基金　南アジア地域事務所）

陳川・三重桜・津高 陸上競技部ＯＢＧ会盛会に開催される

筒井忠勝（昭和27年卒）

陳川・三重桜・津高の、かっての陸上競技部員のＯＢＧ会が十月二十五日、津市のプラザ洞津で三十人が参加して開催されました。

卒業年度は昭和初期から同三十七年卒まで会員数百七十人の会、会長の清水一男氏（建築設計士・津市栄町一―九〇三）を中心に当時の顧問三ツ村健吉先生をご招待して賑やかに、楽しいひとときを過ごしました。年一回の会合ですが、青春の数年間をトラックやフィールドで走り抜き、ジャンプし投擲をした思い出話に花が咲きました。昭和初期から同二十年頃までの第二次大戦時代の軍国主義？陸上競技、引き続いたみじめだった敗戦、空襲で校舎が焼失した当時の空腹を抱えての部活動と猛練習、その後の津高校陸上競技全盛時代など、年度を追って懐かしいスピーチが続きました。昭和二十五年にはハードルで全国制覇した先輩（故人）同二十六年にはオリンピック候補で期待された先輩など、先人の思い出話も楽しいものです。前津高校長・鈴山雅子さんも会員（中距離選手・今回は欠席）、来年からは現職部顧問先生をご招待しようと申し合わせました。またＯＢＧ会を知らない会員も多いことから、同窓会新聞に掲載して広く報告しようではないか、と声が出された次第。来年秋には総会を開催しますから元陸上競技部だった貴方、貴女―ぜひ清水会長、又は文責の筒井（津市半田二―二六―一七八）までご連絡、ご加入ください。

クラブ活動

四百メートルリレーで東海大会入賞!!

2年10組　小川雄太郎

僕は小学校からずっと陸上を続けてきました。正直、津高校陸上部に入部する前はそんなに強い部活ではないと思っていました。

最初は、練習もいまいち、まとまりがなかったし、サボる人もたくさんいました。しかし、昨年の県高校総体の四百メートルリレーで五位に入賞し東海大会に出場してから、部の雰囲気が変わりました。練習にもまとまりが出てきて、男子四百メートルリレーでは、常に県大会で上位に入賞できるほど強いチームに成長しました。

今年の県総体と東海総体は、僕にとって一生忘れられないレースになりました。県総体では、個人種目は残念な結果でしたが、リレーは優勝することができ、東海総体でもリレーで八位入賞という、津高史上初の快挙を成し遂げることができました。

僕は未だに、松ケ谷、中尾、澤、小川のオーダーで挑んだ東海総体四百メートルリレー決勝の興奮を忘れることができません。あの時僕は、津高陸上部はこんなに強かったのかと感動しました。推薦で一人も選手をとらない進学校がここまで東海大会で勝負できるのかと。そして改めて、こんな素晴らしいリレーメンバーに出会えて本当によかったと思います。

僕にはあと一年、シーズンが残っています。もちろん今年のような結果では満足できません。来年は津高の名を陸上でも全国に知らしめられるような選手になります。インターハイでのメダル、これが僕の高校生活一番の目標です。

平成十五年度同窓会総会・パーティーのご報告

実行副委員長　田中康一郎（昭和57年卒）

去る八月二日（土）、七百十七名の同窓生のご出席をいただき、津センターパレスホール並びに津都ホテルにおいて平成十五年度陳川・三重桜・津高同窓・パーティーが盛大に挙行されました。

総会では川喜田新同窓会長と岡村前会長の和やかなバトンタッチのご挨拶をいただく中で、水越校長の祝詞も頂戴し、代議員会報告等滞なく行事は終了しました。

続くパーティーでは、竹林実行委員長のご発声でいつもの打ち解けた歓談が始まりました。

本年の同窓会テーマは「友よあの頃……この日ばかりは饒舌な自分と出会える気がする。」と題して、原点に立ち返り母校の紆余曲折を秘めた歴史を紐解く旅を企画しました。在校生の津高音楽部のコーラスに始まり、一三〇年にも及ぶ津高の歩みを綴った秘蔵の映像を楽しんでいただきながら、時代の装束を身にまとった出演者にあの頃の自分を重ね合わせていただきました。

そして応援歌・出陣歌・凱歌・やめろ節と懐かしいメロディで盛り上がり、最後はやはり会場が一体となった恒例の熱い校歌斉唱で締めくくりました。

母校と母校の歴史を作ってこられた先人の歩まれた道筋を追体験していただく中で、人生の最も多感で大切な時期を此処で過ごすことができたことを、改めて誇らしく感じていただけたのではないでしょうか。

後に続く世代にもそう感じてもらえるように、私たちも母校に恥じぬ歴史を歩んでいきたいと、思いを新たにしました。

締めくくりにお互いに来年の再会を約して、名残を惜しみつつ会場を後にしました。

百二十五周年を記念して 同窓会名簿発刊、美術展・記念旅行も計画

百二十五周年を記念して名簿が発刊されます。

今回は、二市八町村が平成十七年一月一日合併が予定されていますので、その後の発行ということで準備を進めています。前回同様、姫路の株式会社サラトに委託しました。来年六月頃、皆様のもとに調査カードが発送される予定ですのでご協力をお願いいたします。価格は五千円です。

なお、本校同窓会と全く関係のない業者が、同窓会名簿に関してと称し、住所の照会、さらに販売等で皆様を混乱させる事態もおこっています。本校の名簿発刊案内には必ず同窓会長名が入り、返信先が津高同窓会になっております。また、事務局から電話で、卒業生の住所・勤務先の照会をすることは一切ありませんので、くれぐれもご注意下さい。

＊――＊――＊

☆美術展については、平成十七年夏、開催の予定です。ご出品を考えておられる会員はご準備ください。

＊――＊――＊

☆記念旅行につきましては、旅行社が企画中です。

陳川55会同窓会開催

岩田直衛（昭和14年卒）

毎年初夏に開く陳川55会同窓会は本年は津市桜橋の中華料理の「陶陶（タウタウ）」にて二〇〇三年（平成十五年）六月七日正午より開催。

東京や奈良県の生駒、名古屋からも出席があり、二十三人の会員が出席し、気勢をあげ、楽しいひとときを送ることができた。

なお本年は津駅から会場までタクシーにて送り、寄付金もあったので、横浜中華街の中華の菓子をおみやげに配った。

津高校進路事情

進路指導部　川口由生

今年の新入学生から、高等学校でも、新しい学習指導要領に基づく教育活動が始まりました。今回の学習指導要領の改定においては、「ゆとり」のなかで自ら課題を見つけ、考え、解決する力を育み、「生きる力」を身につけることが重視されていますが、学習内容や授業時間数が大幅に減少したことなどから、「学力の低下」を心配する声も多く聞かれます。文部科学省が一方では緊急アピール「学びのすすめ」を出して「確かな学力の向上」を唱っていることが、ますます学校現場を混乱させています。しかし、本校では、このような状況の中でも高い学力を維持・発展させるべく、昨年の四月から六十五分授業を始めました。これは、授業時間数を確保すると共に授業内容の精選を図り、授業計画として「シラバス」を作成・提示することで、生徒には「自学自習」を促すという本校での学習指導の一環です。また、二年次に類型別クラス編制（類型Ⅰは文系、類型Ⅱは理系）を行い、より一層細やかな進路指導ができる体制を執っています。

さて、本校では大多数の生徒が四年制大学に進学を希望していますが、大学の変化の早さに進路指導部も驚かされる日々です。大学の構造改革に伴う国公立大学の独立行政法人化や、法科大学院構想など次々と新しい事柄が現実に動き出しています。さらに、平成十八年度には、大学入試センター試験でリスニングテスト導入が決まりました。またAO入試に代表されるような、大学毎の入学者受入方針（アドミッションポリシー）に即した高度な問題、かつ「生きる力」を求めた今回の新過程の主旨を踏まえた思考力・総合力・問題解決力を求める入試問題の増加などが起こってきており、こうした大学全体の「流動化傾向」はますます顕著になってきています。進路指導部としましても、大学入学前、入学後を通じて、学ぶ分野やその学び方について、メニューの個性化・多様化、自由化が進む流れを的確にキャッチすることが必要であり、この流れを生徒にわかりやすく伝えることが重要になってくると考えています。また、大学・社会の環境変化に対応するだけでなく、生徒の進学に対するモチベーションを高めるための工夫が必要だと考えております。

本校進路指導部では、数年前より―全ての生徒の願いを叶えるために―をスローガンに、学習指導、進路指導両面にわたる三カ年のガイダンス計画を策定し、入学年度ごとのガイダンス教育に力を入れています。全学年を対象に面談週間（四月・十月の二回）を設ける一方で、「なりたい自分をみつける」ために、その1からその3より成る「自分探し事始め」を企画してきました。この企画の一つめは、生徒自身が学校を飛び出して積極的に現場を体験する「ミニ・ツアー」です。今年度は次の三つのツアーを行いました。①名古屋大学理学部管島臨海実験所の訪問、②住友電装株式会社の訪問、③三重大学医学部医師体験入学への参加。①ではホヤの発生について学習を深め、②では海外企業との取引における興味深い体験談を聞かせていただきました。また、③では医療現場を体験することができました。それから企画の二つめは文化講演会です。十二月には本校昭和35年卒業の名古屋大学大学院法科学科教授　森　英樹氏に講演を依頼し、さらに、二年生希望者には本校昭和47年卒業の名古屋大学環境学研究科教授村田静昭氏による模擬授業を計画しております。そして三つめには、来年二月から三月にかけて学部別・大学別の受験座談会を予定しております。例年のことながらこれらの企画には、講師の先生方はもちろん、その準備段階におきましても、多くの同窓生の皆様に大変お世話になっており、卒業生の方々が多方面でご活躍なさっているありがたさを身にしみて感じております。

ところで、今年三月の進路状況ですが、国公立大学の合格者は、約二七〇名でした。現役生の頑張りと、自分の志を曲げずに再度挑戦した過年度卒業生達の努力の結果であると思います。国公立・私立ともに関東方面への進学者数が徐々に増加してきたこと、海外の大学を目指す者も少なからず見受けられることが最近の傾向としてあげられますが、こうした傾向は今後も続くのではないかと思っております。

最後になりましたが、進路指導部の目標は、①ひとりひとりの願いを大切にする、②データを活用した進路指導を行う、③自らの能力・適正について考え、大学で何を学ぶか、社会に出てからどんな職業に就くのかを明確にすることによって自らの高校生活を考える、の三点です。卒業時に生徒全員が、「津高校で学べてよかった」と思えるように頑張っていきたいと思います。

どうかこれまで以上に同窓会の皆様のご理解、ご協力をお願い申し上げます。

（大学合格者数）

	国立	公立	私立	短大
(2003) H15年	214	54	681	11
(2002) H14年	244	49	749	12
(2001) H13年	173	34	572	14
(2000) H12年	226	40	669	22

（主要大学合格者数）

	北海道	東北	筑波	お茶の水	東京	一橋	東工大	東京外大	横国大	静岡	金沢	信州	名古屋	名工大	名古屋市立	三重	県立看護	京都	大阪	大阪外大	大阪府立	神戸	奈良女	広島	慶応	早稲田	上智	青山学院	中央	東京理科	日本	明治	法政	立教	南山	名城	皇学館	龍谷	京都産業	同志社	近畿	立命館	関西	関西学院
(2003) H15年	3	0	3	1	4	1	2	0	9	11	5	7	23	9	8	63	1	10	9	0	7	6	2	0	11	20	0	2	9	19	15	7	7	1	49	35	19	18	13	42	36	101	37	30
(2002) H14年	2	4	9	1	2	1	2	0	6	10	13	10	32	9	7	63	4	10	6	0	6	7	4	12	8	28	1	10	17	14	14	18	14	5	65	32	15	17	5	56	35	118	36	21
(2001) H13年	2	1	6	2	4	2	1	2	2	8	3	6	22	5	7	48	3	6	15	2	3	7	1	0	12	30	3	12	8	6	5	9	10	1	52	37	13	9	5	29	26	77	33	16
(2000) H12年	2	2	1	0	4	0	1	0	2	6	8	8	22	10	6	69	3	12	11	1	2	8	4	2	14	28	4	9	11	9	9	15	10	4	32	39	17	16	10	11	33	90	51	18

各地で同窓会開催

九州同窓会

六月一日福岡国際ホールで、十四回総会を開催しました。水越学校長と本部事務担当の佐々木様が、来賓として出席されました。

総会では役員改選で、芦屋市に転居された会長村田正文氏（昭和22年卒）に代わり、鈴木匠氏（昭和16年卒）新会長、福井儀郎氏（昭和26年卒）新副会長が選出されました。学校長より、教育の本質論は別にして具体的目標に、国公立進学を三百名にして、県下一を目指している事等が紹介されました。

会員談話は堀内俊之氏（昭和38年卒）が「経営者の目で見た今日の食料事情」と題して、色々な視点より問題を提起され、中でも食の安全保障の難しさについて詳しくお話していただきました。沖縄から参加いただいた白井澄子氏（昭和16年卒）が、津高出身の笹尾鉄三郎氏（明治19年卒）の宗派を超えて神の道を伝えられた偉業についてお話していただきました。

熊本より出席された名和一帆氏（昭和10年卒）の乾杯の音頭で歓談に入り楽しい一時を過ごしました。

津高九州同窓会会報は、六頁にも及ぶ第四号を配布することが出来ました。総会に出席されなかった方々にも同窓会の様子を詳しくお知らせする事ができました。

（第四号津高九州同窓会会報より）

東京同窓会

平成十五年度津高東京同窓会は、五月二十四日（土）に霞ヶ関・東海大学交友会館で開催されました。

今年は役員改選の年にあたり、会長の加藤精一様の留任と新副会長の竹内順子・吉田万里子様の就任が満場一致で承認されました。

ご来賓は本部同窓会から岡村会長、藤岡・橋本両副会長、事務局の佐々木様が、母校から水越校長がお越し下さり、また、恩師の森下・堀両先生をお迎えしました。乾杯の音頭を堀先生にお願いし、懇親会に移りました。この間、各方面からの祝電等を披露しました。

今年はEメールを紹介し、特に中国の北京・大連の会員から届いた『SARS』に関する生の声を報告し、インターネット時代を共有したひとときでした。

『きばつさはなくてもいいの同窓会』のうちに時間は過ぎ、いつもの陳川・三重桜・津高の順番で校歌を各グループ毎に力強く、想いを込めて歌っていただきました。大先輩、若い後輩の皆さん共々なつかしい学生時代にタイムスリップされた事と思います。

また今年三月に卒業の佐藤君と常木さんが、ユーモアをまじえてスピーチをしてくれました。

最後に津高東京同窓会のますますの発展と皆様のご多幸・ご健康を祈念し同窓会総会を終了しました。最後になりましたが、陳川・三重桜・津高の諸先輩ならびに遠路お越し下さいました恩師・ご来賓の方々に心よりお礼申し上げます。

（31年卒　輪番幹事有志）

名古屋同窓会

平成十五年九月二十日（土）、名古屋東急ホテルにて十五年度津高名古屋同窓会が百十名の同窓生を集め、開催されました。総会に先立ち、新しく同窓会長に就任された川喜田会長のご挨拶の中で、制服の廃止を唱えられ当時からファッション志向であられたご様子がうかがえ、印象に残りました。

続いて同じファッションの演題で昭和44年卒の高北幸矢氏（名古屋造形芸術大学教授）の講演会が行われました。講演終了後、出席者全員のファッション審査をして頂き、全員及第点をいただきました。

懇親会では、恒例のテーブル対抗津高クイズ（年々出題が難しくなっています）で大変盛り上がり、旧交を温めるうちに閉会となりました。津高クイズでは、おそらく最高齢かと思われる方がヒーローとなりました。懐かしい顔を見つけられた時、一瞬若返られる輝いた表情を見るのはとても嬉しいことです。名古屋同窓会は益々盛会となっています。皆様ご出席を。

（昭和48年卒）　滝本　昭彦

京都同窓会

第三十七回平成十五年度津高京都同窓会総会が十月十九日（日）例年通りホテル平安の森京都に於いて行われました。京都特有の少人数乍ら家族的な雰囲気の中で本部より川喜田会長、橋本副会長、事務局佐々木様、学校側より水越校長をお招きし、なごやかに行われました。中西幹事（昭和23卒）の司会のもと式次第も万事とどこおりなく運び、各人の紹介の下、陳川昭和7卒、昭和16卒、三重桜昭和10卒、昭和14卒と錚錚たる寸評続出し、さすが戦前のバックボーンを持ち自己をしっか

りと持った人柄で考えさせられるスピーチがありました。

人生頂上もあれば谷もある世の中でこの世で二つは良い事はない。裏を返せば二つと悪い事はないとの川喜田会長の人生訓で感銘をうけ、和気あいあいと京都らしく、しなやかな総会でありました。

来年も十月二十四日（日）を約束し、本部との密なる連絡、若手会員の参加をスローガンとし継続は力なりと四十回、五十回と、約束して盛大の内に散会いたしました。

中井　敬（昭和27年卒）

大阪同窓会

第三十七回津高大阪同窓会は、十一月九日（日）に天王寺都ホテルにて本部より竹林・小柴両副会長、津高より水越学校長、恩師の鈴木、鈴山両先生をお迎えして総勢百七十名で盛大に開催されました。

奥田会長のご挨拶に引き続きご来賓の四人の方々から夫々に世相を反映した味わい深いお話を承った後、記念講演は川原啓美氏（昭和20年卒）アジア保健研修財団理事長より「共生の世紀」と題して「共生」ということに対して認識を新たにさせられるスライドを観ながらのお話をいただきました。懇親会は、高虎太鼓の勇ましい画像を観ながらはじまり、伊勢音頭を聴きながら本日最年長の長谷川辰王様（昭和9年卒）の乾杯でスタートしました。プロジェクトチームによるアトラクションは今回は「ふるさと」がテーマで、先ず「阿漕平治」の民話語りで始まりました。続いてビデオ上映で故郷の歴史・現状・未来計画などを観て郷土の行く末に暫し想いを馳せました。福引き大会では番号が読み上げられる度に一喜一憂して楽しいひとときとなりました。

校歌斉唱は今年は先ず陳川・三重桜・津高の校歌を音楽担当の先生のご指導により全員で練習し、その後精一杯校歌を熱唱しました。

この忘れかけている歌を思い出すための練習を試みることに加え、今回は案内状に母校正門の象徴的存在である巨大蘇鉄の切り絵を頂き母校をアピール、また会場を新たに多人数収納可能なホテルに移行するなどが目新しいものでした。

校歌斉唱の後は、静かに「故郷」を斉唱しながら来年十月十七日（日）の再会を約して散会となりました。

西谷美美（昭和32年卒）

訃報

謹んでご冥福をお祈りいたします。

（平成15年10月31日現在）

旧職	柴崎二郎	16	佐々木忠男	23	平久敬	7	岡石孝子	26	中村勝
	野間定之	16	西田了	23	中山美一	7	高橋みつ子	27	織部輝雄
	扇田はるへ次	17	丹羽哲夫夫	23	藤波武己	8	西川朗子	27	鈴木三重子
	田中政次	17	谷田和良	23	宮村克生	8	廣野とよ	28	玉谷静子
	山中文夫	17	佐藤政二	23	本山昭卓	10	玉置きみゑ	28	岡島康子
陳T12	真弓篤	17	西井健通	23	籔卓	10	羽根与志	28	喜田川忠之美
13	片岡恒	17	豊田省吾	客23	山岡順四郎	11	濱口きん子	28	小野嘉義二
S2	渡邊忠格	17	伊藤幹夫	23	岸田英夫	11	行方禧子	28	岡高美隆
4	山川真證	17	富田松博	20入	山川和雄	12	奥山田鶴ゑ	28	堀江翠
4	藤本芳郎	17	高松章	20入	大野義雄	12	久田ちゑ	29	稲垣俊・孝
5	大山義資	18	野垣内周	三T5	伊東子	13	山口早苗	30	橋本名代子
5	関口直	19	鈴木貞夫	9	浅生貞子	14	米沢千恵子	30	中村之
6	御子暢治	19	小西勝	9	岡田文子	14	会田千鶴子	31	横井島弘
7	横山達郎	19	増田正度	10	堀木かず子	14	西村章子	31	小島菜
客8	松場弥	20	近沢一茂信	12	平松はる子	14	家城幸子	32	若森
9	大島勇一	20	丸一野植蔵吾	12	津田文子	14	本誠子	33	大森
9	野口弘	20	細幸静夫	12	中谷貞子	14	前田みえを	34	堀和
9	稲垣健児	客20④	高橋裕	13	奥田ふさ	14	徳田静子	34	菊岡守
10	富田慎二	20④	久留恵	13	池田和	15	伊藤ミヤコ	34	川井
10	清水順之助	20④	別所敬文	13	伊東節	15	内藤ウタ子	37	清水谷巌
11	内藤正之	20④	寺嶋龍男	14	田中秀	17	溝田ふみ子	40	荻野徹
11	米川篤	20④	冨島利俊	14	落合きみいで	20	草深さだ	41	田島和
12	藤坂茄子華	20④	谷口忠三	15	小林れひで	20	川口八千代	45	森本吉
12	藤村守	20④	村井隆雄	15	上村可津ゑ	20	紀平淑子	45	瀧永
13	手鹿良美	21	稲垣稔理	15	加藤道子	20④	近藤子	47	松岡秀
14	駒井進	22	奥村泰明	S2	稲垣かずよ	20④	竹内貞子	48	橋爪健
14	金丸幸太郎	22	脇田一夫	3	奥山きよ和	20④	真田隆子	49	島本晃
15	片岡俊二	22	福田彪	4	斎木敏	23	吉田登喜子	51	山本路
15	柴田利之	22	平野久一	5	杉田洋子	24	大富田洋子	56	小沼正
客15	高瀬義孝	22	中瀬夫	6	山本芳子	20入	松田美子	H6	杉崎春
16	堀木和治	22	佐々木了	6	渡辺登志子	高S25	岡田好子		
16	小磯希一	22	渋谷伯夫	7	坂下ヒデ	25	山田学		
16	田辺敏郎	23	打田邦也	7	後藤咲子	26	森田拡		

お知らせ

平成十六年度　同窓パーティー

日時　平成十六年八月七日(土)
午後三時より

場所　ホテルグリーンパーク津
(津駅前アスト津)

担当学年幹事　昭和46年卒（代表　前川　祥一）
昭和58年卒（代表　能仁　宏樹）

平成十六年度　同窓パーティー案内

準備委員会事務局長　中島　順二（昭和46年卒）

平成16年度同窓パーティーは、昭和46年卒と昭和58年卒の学年が担当をおおせつかっています。

「右も左も真っ暗闇じゃござんせんか」と、故鶴田浩二を思い出させる昨今のご時世では有りますが、「せめて楽しいひとときを」と、小市民的発想で、準備委員一同、鋭意努力をしている次第です。

未だテーマ、コンセプトなど決まっておりませんが、（十月二十日現在）沢山の方々に楽しんで頂けるパーティーにしたいと考えております。

また、46年卒業生の画家数名による展覧会を隣接するアスト津のギャラリーにて開催致します（八月七日～十日午前中）ので、併せてお楽しみいただけるかと思います。多数の皆様方のご参加を心よりお待ち申し上げます。

三十四年同期会のお知らせ

鳥羽での一泊同期会より早三年、来年は定めの通り四年毎の同期会開催を迎えます。ご好評いただいた前回にならい一泊の集いを予定しております。詳細が決まり次第お知らせ致しますので奮ってご参加下さい。お待ち致しております。

中根　章（昭34年卒幹事代表）

事務局だより

▼同窓会報第四十一号をお届けいたします。今回からご覧の通り、A4判になりました。今まで親しんでいただいていたサイズが変わりましたが、今後は綴っていただけるように穴も開けました。ご愛読ください。

▼今号から今まで掲載しておりました「異動」のページをなくしました。紙面および経費節減の方針からです。ご了承ください。ただし、皆様方の異動につきましては、これまで通り事務局で受付けておりますので、葉書、FAX、メールでお知らせください。

▼同一家族で電話番号の同じ会員への会報の送付につきましては、今回より一部にさせていただきます。なお、従来通り（一会員一部）ご希望の方はお申し出下さい。お送り致します。

▼昭和49年以前の卒業の方で、終身会費未納の方は、同封の振込用紙にてお振り込みをお願いいたします。終身会費につきましては、昭和49年卒業生から全員が入会し、終身会費を納入いただいております。

また、振込用紙は、出版物等の注文用紙も兼ねておりますので、ご利用ください。今後の振込用紙の内容につきましては現在検討中です。

▼三重桜昭和13年卒菊組の皆様より二万円を同窓会にご寄付いただきました。謹んでお礼申し上げます。

☆お詫びと訂正

▼昨年の会報異動の欄で松原千野様の住所の所に松本（緑）かおり様の住所を掲載いたしました。〒350－1167埼玉県川越市大袋新田の6918は松本かおり様の住所です。また、物故者欄に三重桜（昭和6年）卒の大森（富田）いく様が掲載されていましたが、大森様はご健在です。謹んでお詫び申し上げ訂正いたします。

◎津高同窓会事務局
TEL・FAX 059-229-7331

◎同、メールアドレス
tsukou-d@axel.ocn.ne.jp

◎津高同窓会ホームページ
http://www7.ocn.ne.jp/~tsukou-d/